

— セミナー「実践！コミュニケーション・
— マネジメントを拓く」開催

— メディカルコーチングで — めざす医療安全



1月14日(土)神奈川県総合医療会館にて、聖マリアンナ医科大学病院看護部主催、社団法人神奈川県看護協会後援によるセミナー「実践！コミュニケーション・マネジメントを拓く——医療安全とメディカルコーチングの視点から」が開催され、メディカルコーチングを導入した同院看護部の実践が報告された。なお本セミナーを共催した株式会社ハーティストの取締役トレーニング・ディレクター清野健太郎氏によると、メディカルコーチングとは、医療事故や紛争の大きな要因となっているコミュニケーションエラーの防止、医療現場におけるチーム医療などに必要な双方向コミュニケーション能力向上のために開発・体系化されたりスクマネジメント手法のひとつという。

開会挨拶を行なった同院看護部長陣田泰子氏は、メディカルコーチングについて「いまや必須の技術。看護チームの力を最大にし、また看護師・医師の対患者コミュニケーション能力を向上させ、真のチーム医療を実現させるもの」と語った。

基調講演では、「私がセーフティーマネージャーになったわけ——対立から対話、そしてパートナーシップへ」と題し、新葛飾病院医療安全対策室セーフティーマネージャーの豊田郁子氏が壇上に立った。同氏は、長男(当時5歳)が医療事故により死亡したことから、被害者家族として活動を開始、さらに同院院長に請われて現職に就任。医療事故の被害者家族として、また日々同院の医

療安全対策に取り組む立場から、医療事故の背景にある医療者-患者間のコミュニケーション不足の問題などについて指摘し、自ら取り組んでいる患者相談窓口や患者図書館の設置など、患者参加のしやすい医療環境づくりを訴えた。

清野氏がメディカルコーチングの概要について説明した後、聖マリアンナ医科大学病院の看護職員や医療安全管理担当者による実践報告が行なわれた。これは看護師間、看護師-医師間、医療者-患者間それぞれのコミュニケーション場面を、メディカルコーチングの視点でとらえ分析するもので、特に看護師-医師関係を巡るメディカルコーチングの報告のなかでは、医師や看護師に扮した同院看護部の職員によるロールプレイが行なわれ、参加者の関心を引いた。

最後に一連の報告に対して、同看護協会医療安全対策課長の安井はるみ氏と、産業心理学を専門とする明治大学政治経済学部教授の木谷光宏氏が講評を行なった。安井氏はメディカルコーチングをいろいろな場面で活用できるスキルで意図的に活用していくべきものとしたうえで、うまくいった事例を言語化して分析することの必要性を説いた。また木谷氏は、専門職である医療者の組織内における情報共有の重要性に言及、そのために必要な安心感・信頼感・満足感合わせて「アンシンマン」の職場づくりを心掛けるよう提案した。

●本誌編集室